

# 生徒のアドベンチャープログラム導入時における 学級所属意識に関する考察

—公立中学校3年生の事例をもとにして—

Study on reaction and class sense of belonging of the students  
at the time of adventure program introduced: On the basis of a public junior high school third grade  
of the case

大山 剛

Tsuyoshi Oyama

キーワード：TAP、学校教育、人間関係、人権教育、質問紙調査、公立中学校

Keywords：Tamagawa Adventure Program, school education, human relations, human rights  
education, questionnaire, public junior high school

## 研究の概要

本研究は玉川大学TAPセンターで相談の多い「アドベンチャープログラムを導入してみたいが何から始めてよいか、あるいは導入後は学級の中でどのように活用していけばよいか、その道筋や方法が分からない」という教育現場の声をきっかけに、アドベンチャープログラム導入時の生徒の反応に焦点を当てて研究を進めた。すなわちプログラム導入時に「所属する学級に対して各生徒が、自分を中心にして、友達との関わりの中で、そして現在の学級の様子について、どのように考えているか」を、質問紙調査によってアドベンチャー教育の概念に関連づけながら明らかにしている。

調査の結果、学級によって差は見られるが「アドベンチャーする力」とフルバリューの概念について、クラスを肯定的に捉えている傾向が見られた。反対に自主性などに支えられる「人生を開拓していく力」や課題解決へのアプローチには消極的である傾向も見られるので、その個々の生徒の状況を踏まえてプログラム計画することが課題として明らかになった。

## 1. はじめに—玉川アドベンチャープログラム (TAP) について

玉川大学TAPセンターは学校教育の分野を中心に、学内外でアドベンチャー教育を基盤とした体験学習プログラムの開発と実践<sup>1)</sup>を展開している。具体的にはTAP (Tamagawa Adventure Program) の略称で以後TAPと記す) の名称で、体験型心の教育プログラムの提供や指導者研修<sup>2)</sup>を実施している。TAPセンターの前身「心の教育実践センター」は、玉川学園・玉川大学の教育理念である全人教育の一端を担う施設として2000年4月に設立され、学内に「チャレンジコース」と呼ばれる、国内で初めての規模となるアドベンチャー教育のための施設が常設されている。こ

の施設ではK-12、大学、大学院生のみならず、教育に携わる（学校教育・社会教育等）指導者を対象とした生涯学習のプログラム等、教育的なニーズに合わせた幅広い活動を推進している。

設立から15年が過ぎ、少しずつ変化を重ねているTAPであるが、その主なねらいとして、(1) 相互尊重（フルバリュー）の心<sup>3)</sup>を学び、(2) 内発的動機でチャレンジすること（「人生の開拓者」<sup>4)</sup>たること）、(3) 自己や集団のVisionに向かって努力していくこと（Adventure）という3点<sup>5)</sup>を重視しながら、個人と集団の学びの過程に焦点を当て、学習者の成長を促していく考え方に変わりはない。個は集団の中で成長を遂げていくが、集団を通じての体験から「何を学び、誰と学び、何を目標として学ぶか」は、「個と集団」の成長に非常に重要な要素となる。そのため、TAPセンターで実践されるプログラムは、各年齢層の個人やグループのニーズに応じた目標設定を大切にしている。と同時に、その目標を達成していくためのプログラムデザインを実践している。こうした活動をとおして社会性の育成を可能とするTAPは、教育行政機関や学外の教育機関、及び一般企業からの要望も増加しており、まさに社会のOn Demandのプログラムと考えている。<sup>6)</sup>

（付記）本稿ではTAPと表記しているが、過去の研究や文献ではtapと小文字で記述されている。これは本年度（平成27年度）より大学附置機関としての設置にともない大文字表記に切り替えたものである。したがって、その意味と内容は以前と同様で変化はない。同じくTAPセンターの名称も、本年度からスタートであるが、「全人教育研究所心の教育実践センター」及び「学術研究所心の教育実践センター」の組織編成にともなう変更で、センターの目的に変化はない。これは本来、巻末に付記するものであるが、本稿でTAPの表記が多用されるので、冒頭に記すことを了承いただきたい。

## 2. 研究の目的

15年間の経緯の中でTAPに限らず、アドベンチャープログラムやグループ活動に焦点を当てたアクティビティを通して「個と全体」について学ぶことの有用性や自己概念の向上は当初から認識されていた。<sup>7)</sup>また初等中等教育の分野においては「アドベンチャーを教室に」という概念でAITC(Adventure In The Classroom)の勉強会<sup>8)</sup>や研修会も活発になり事例報告<sup>9)</sup>も増えている。加えて、大学においても課外活動や学校ボランティアの運営におけるコミュニケーションスキル、初年時教育としての人間関係の構築、あるいは他者受容感や自己肯定感という観点<sup>10)</sup>での以前からの関心に加え、指導と支援のあり方について、教員養成大学の中での研究<sup>11)</sup>や、教科教育の中でのアドベンチャープログラムの効果を日頃の授業実践の中から考察する研究<sup>12)</sup>も進められるようになってきた。

このようにTAPを含めたアドベンチャープログラムへの期待が高まる状況の中、一方では、センター開設当初から「アドベンチャープログラムを導入したいけど何から始めて良いかわからない」あるいは「試してはみたものの学級の中でどのように活用していけば良いのか道筋や方法がわからない」という困惑に近い指導者の要望や相談の声は、よく耳にしており、今日でもそうした相談は決して少なくない。

もちろんTAPに限らず、新しい試みを実践していくことは、教科の学習指導や普段の生徒指導と同様に、教材研究や指導経験の積み重ねが必要となる。したがって、TAP導入時に「何をどのように準備して、どのように始め、次につなげるか」は大切な要件であることは理解しつつ、新しさゆえに同僚や先輩に相談することも難しい。

例えば「みやぎアドベンチャープログラム（以後MAPと記す）事業」<sup>13)</sup>は地方自治体としての教育委員会主導のもと全県で取り組み、その成果は、文部科学省でも生徒指導の有益な手段として報告されている。しかし同時期、一方ではMAPの取り組みについて、主に教員の中での評価が二分されてしまう傾向も見られ、アドベンチャープログラム推進に大きな課題<sup>14)</sup>があることも示され、教育現場での担当する教員のMAPに対する理解と啓蒙啓の難しさも報告されていることを考えると、個人の体験をベースにして展開していくアドベンチャープログラムのような教育手法は、なかなか普及が厳しい現状もあろう。

そこで本研究では「プログラム導入時の状況の中から、次の方向性を確認するための手法」として、所属学級に対する生徒の考え方と学級全体の傾向について、アドベンチャープログラムに関連する質問紙調査を通して確認することで、以後のTAPの目標設定やプログラム実施の重要な要因になると考え、結果、前述の「どのように活用していけば良いのか、その道筋や方法が分からない」という質問に対する1つの回答になるよう、省察を加えるものである。

### 3. 研究の方法

本研究ではTAPセンターが関わってきた実施例の中から、本学教育学部の卒業生として勤務している教員も少なくない地域であり、同時に教員研修会等でTAPを紹介しているE市立E中学校でのアドベンチャープログラム実践にともなう生徒の意識を測定した。

調査内容は資料1のとおりである。これらの質問によって、自分の所属する学級についての生徒の考えを集計していく。この調査用紙における項目は私立学校と公立学校のデータ比較も予定されている関係から、玉川大学併設校部門で実施している調査用紙と同じ内容で実施した。これはTAPに関連する川本（2012）の先行研究の結果<sup>15)</sup>を根拠として、得点の高いカテゴリーを抽出したものである。すなわちアドベンチャープログラムを実施する上で大切と考えている「1. アドベンチャーする力、2. フルバリューする力、3. 人生の開拓者、4. 気づきを学びに」の4領域の概念について、4段階の評価尺度で測定している。

また集計手順については、田中（2013）が提案している「学級力」の考え方<sup>16)</sup>に基づき、書式グラフや集計表は新潟大学教育学部附属小学校の研究<sup>17)</sup>に準拠させている。これは「学級力」という考え方が教育現場での応用に優れていると考えられ、その活用事例<sup>18)</sup>も豊富で、そのことが学校教育におけるアドベンチャープログラム、あるいは本研究の中でも量的な調査の手法として今後の多様な展開につながると考えるからである。

しかしながら今回の調査研究では、この手法が統計的な手続きとその後の集計に優れていることを前提に活用しているが、本来、田中が推奨している「学級力向上プロジェクト」の方向とは二つの要件で異なることも付記しておく。すなわち一つめは、田中が学級の状態を児童・生徒にも「見える化」しながら継続的な変化の中で指導を考えるのに対して、本研究はプログラム導入時に焦点を絞り、その時点での生徒の反応を探ることを目的にしていること。二つめとして前者は「学級力」という視点でカテゴリーを設定しているが、本研究においては「アドベンチャー」という視点から生徒と学級の間を検証するという点である。

また、質問紙の最後には、自由記述の形式でプログラムの感想を記入する欄を設け、本研究の目的である「所属する学級に対して各生徒が、自分を中心にして、友達との関わりの中で、そして現在の学級の様子について、どのように考えているか」というテーマに対して、質的な側面か

らの調査を進めることも視野に入れている。

a. 調査について

(調査対象)

E市立E中学校3年生184名 男子92名 女子92名

(調査時期)

平成27年11月10日に実施

(調査用紙) ※資料1

資料1

平成27年度	TAP-学級アンケート	月	日( )	組	番	名前
◆それぞれの質問に、1～4の数字に○をつけましょう。						
1: とてもあてはまる		2: 少しあてはまる				
3: あまりあてはまらない		4: まったくあてはまらない				
〈アドベンチャーする力〉						
①目標をたてる	今、みんなで頑張る目標がある学級だ。					1-2-3-4
②一歩踏み出す	目標に向かって、一歩踏み出す努力ができる学級だ。					1-2-3-4
〈フルバリューする力〉						
③学級を楽しくする	何でも話せる雰囲気がある学級だ。					1-2-3-4
④互いに認め合う	勉強や運動、または生活の中で互いに認め合うことができる学級だ。					1-2-3-4
〈人生を開拓していく力〉						
⑤人生を開拓していく	自分に苦手なことや、人が嫌がる事に進んでチャレンジすることができる学級だ。					1-2-3-4
⑥自主的に行動する	先生に言われなくても、自分たちでルールを守りながら生活できる学級だ。					1-2-3-4
〈気づきを学びに変えていく力〉						
⑦課題発見と課題解決	学級の課題を自分たちで発見し、それを解決していくことができる学級だ。					1-2-3-4
⑧自分たちの成長を認め合う	自分や学級の成長を互いに伝え合い、認め合うことのできる学級だ。					1-2-3-4
※今日の感想を自由に記述してください。						



## (調査手続)

アンケート調査は人権教育研究発表校に指定された平成26年度より各学年の生徒に対して実施されており、E中学校の生徒は比較的書き慣れているとの説明と、「今回、アンケート調査は本校では必要ないので、TAPセンターが好きな方法で実施してください」との申し入れがあった。そこで本学で使用している調査用紙の内容を、E中学校の研究主任教諭に提示して、学校長の確認と実施の了解を得た。また、学年主任教諭にもプログラム実施前に、質問紙の内容と生徒への進め方について最終確認および了承を得て実施した。また、本研究終了時の調査結果の報告についても承認を得た。

## (配布と回収の方法)

当日のTAP指導時間の最後に20分間の記入時間を設定して、各自で記入している。配布と回収は学級担任が担当している。

## (回収率)

100パーセント ※ただし184名の生徒のうち、当日欠席14名を除く170名の回答

## b. 調査対象の中学校について

中学校の2015年度の教育目標は「豊かな心と自ら学ぶ意欲と力を持った生徒の育成」で、本年度の重点目標として、「1. 基礎学力の定着を目指した指導法の研究→学習の約束事を守り、目標に向かって努力し、できる喜びが感じられる授業の展開を図る」、「2. 豊かな心を育てる諸活動の研究→きまりを守り、相手の気持ちを思いやり、人権尊重の精神で行動に表すことができるようにする」、「3. 命を大切に健康教育の研究→生活の基本である早寝、早起き、朝ご飯を啓発し、安全な学校生活を送ると同時に、命を大切に健康教育を進める」が設定されている。特に2.（下線部）について、E中学校では2014年度2015年度の2年間にわたり、地方自治体教育委員会から「人権教育研究指定校」として研究活動を続けている。（※下線部は筆者）

TAPセンターはこの研究活動の当初から、計画に対するアドバイスや年度途中で複数回実施される教員研修、あるいは生徒に対するTAP指導について、年間を通して実際にかかわる機会を持っている。この中学校における人権教育の研究主題は「自分を大切にし、他の人を大切にする心を育む指導についての研究」（相互理解を基盤として他者を尊重し、集団のなかで好ましい人間関係を構築することが人権意識の醸成に資するとの仮説のもと、様々な活動を通し、自分だけでなく自分以外の人も大切にする心を育む）である。すなわち「アドベンチャープログラムの基本的な考え方やアクティビティの内容・方法を指導者が理解し、身につけ、実践することにより生徒間の好ましい人間関係を構築することができ、自分以外の人も大切にする心を育むことができるのではないか」を研究仮説として検証を試みる作業であった。

## c. 当日のTAPについて

事前にTAP担当教員と打ち合わせた結果、当日プログラムは下記の内容を基本（資料2）にして進行することで合意、状況に応じて対応することとした。

## 資料2

E市立E中学校3年生TAPプログラム
・日時 平成27年11月10日（火）

- ・時間 午後1時15分～午後2時55分
- ・教室 体育館
- ・対象 3年生5クラス 男子92名 女子92名 合計184名
- ・学年からの情報提供
- ・ねらい：2大行事が終わりみんなで協力する行事が終わりました。これから進路に向けて、個人個人で取り組むだけでなく、クラスや学年で進路に協力して取り組むという姿勢になればよいと思っています。「自分だけよければいい」という考え方ではなく、行事で得たクラスや学年、学校で作りに上げるという協力姿勢を、進路や今後の残りの中学校生活でも生かせるようにしたいです。学年全員で進路を乗り切ってほしいと思います。

#### プログラム内容

1. セーの。輪になっている左右を向く。出会ったらハイタッチ。  
※キューピッド→しゃがむ。一歩下がる→3人で向き合える。
2. ウェスタンチャレンジ-2人で指を出して足し算、かけ算、早い方勝ち
3. ヘリウムリング
4. 私は誰でしょう。180人バージョン
5. サムライ（剣1本バージョン）輪の中心で剣1本を上下にしながら回してその剣をよける。鬼に気づかれないようにリング内で「勇者の印」
6. サークル・クラブ（学級対抗）

振り返りのポイント→あなたのクラスは今？

1. 卒業までに自分は何ができるか。あなたは何ができるか。クラスは何ができるか。
2. 私は何ができただのか。私は何ができたとと思う。
3. 卒業までの4ヶ月、あなたがクラスで大切にしたいことはなんですか。

終了後→振り返りアンケート<sup>\*1</sup>（20分 各自記入） 学年主任のお話

※1 個人情報の扱い アンケート実施に際して生徒に配布する前に「学級の傾向を把握することが目的なので名前が出ることはないこと、自由記述の感想も個人名は使わないこと」を全体の場で説明した。また自分のことや友人のことで、書けないことがあれば無理をして記入する必要はないことも補足してから記入調査を実施した。

## 4. 結果

### a. 各学級の得点平均

質問項目の結果は表1のとおりである。得点はパーセンテージで示している。例えば極端な例であるが、学級全員が1をつけたら100%、2をつけたら67%、3をつけたら33%、もし全員が4をつけたら0%になる。実際にはそれぞれの生徒によって得点が異なるので、それぞれの項目の学級平均を示している。

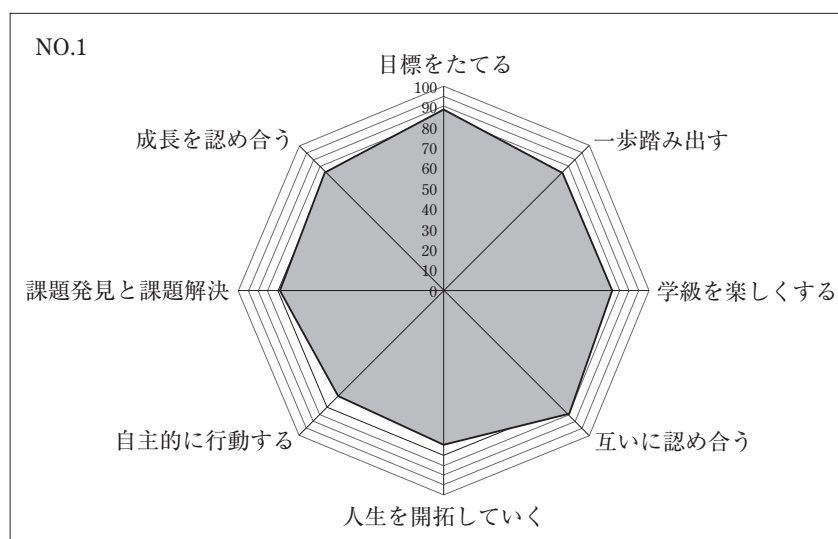
表1 各項目の平均 (%)

領域	項目	1組	2組	3組	4組	5組
アドベンチャーする力	目標をたてる	89	87	67	55	65
	一歩踏み出す	81	85	72	57	67
フルバリューする力	学級を楽しくする	82	82	71	66	73
	互いに認め合う	85	83	70	63	77
人生を開拓していく力	人生を開拓していく	76	73	62	60	65
	自主的に行動する	73	82	60	47	66
気づきを学びに変えていく力	課題発見と課題解決	80	78	66	50	59
	成長を認め合う	81	81	72	55	66

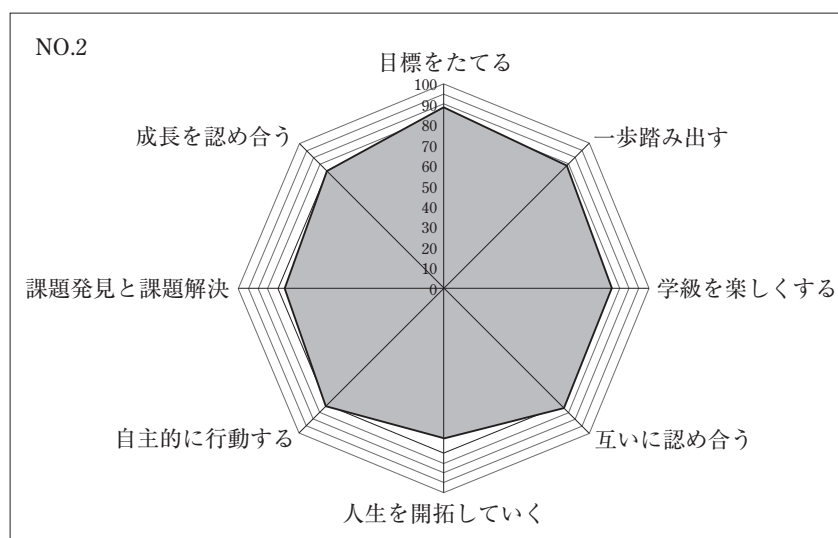
b. 各学級の集計グラフ

1 表の集計をレーダーチャート形式でグラフ化すると下記のような図で表すことができる。

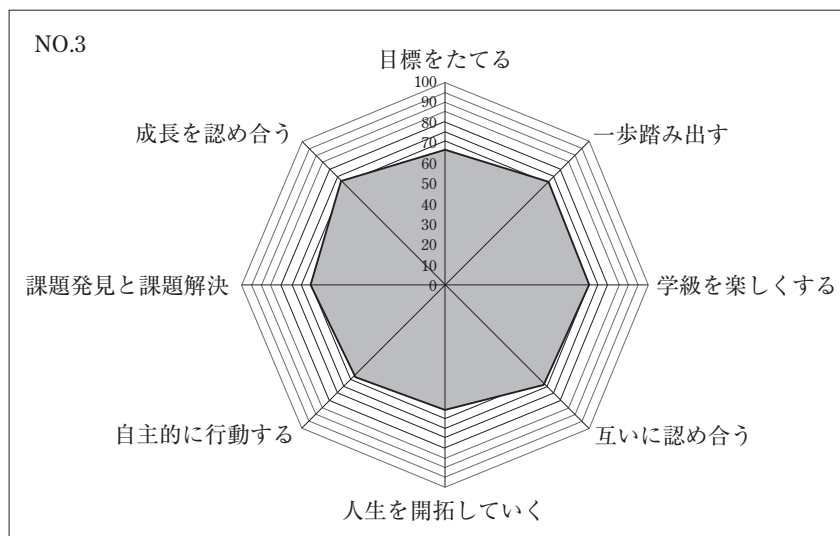
(1組の集計-グラフ1)



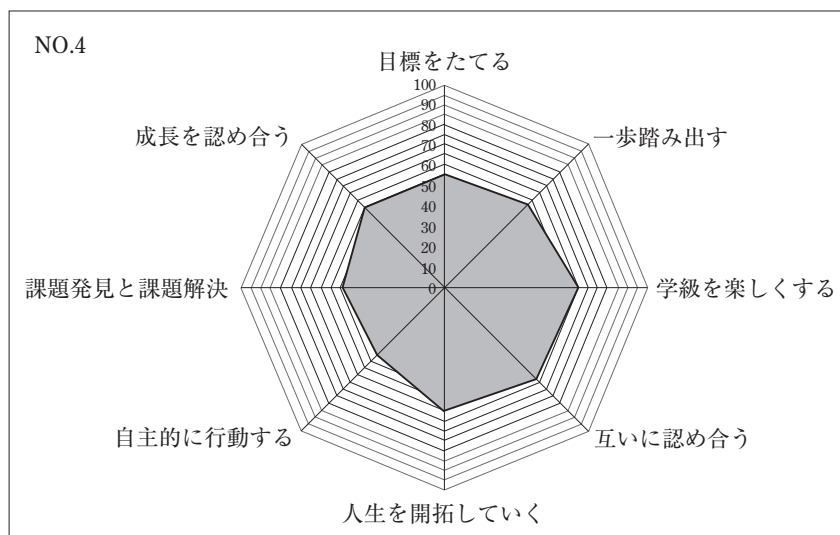
(2組の集計-グラフ2)



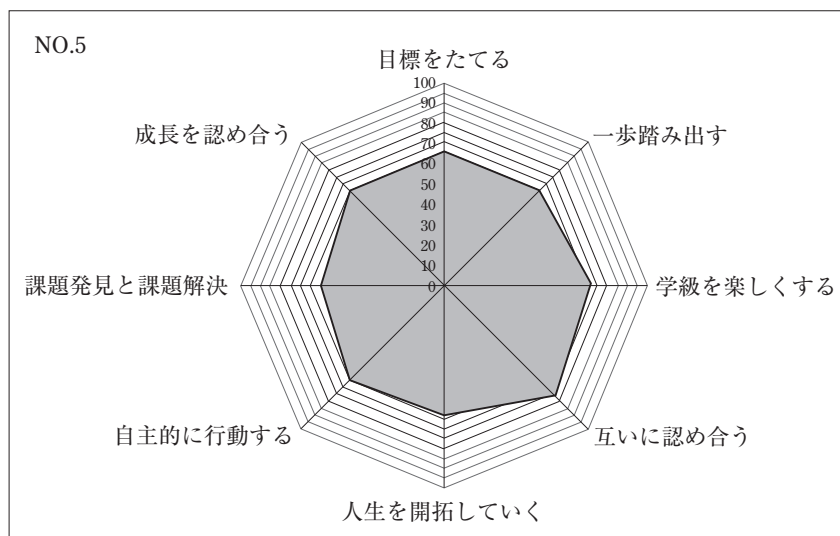
(3組の集計-グラフ3)



(4組の集計-グラフ4)



(5組の集計-グラフ5)





## c. 数値比較

表2は、各学級の項目得点の平均と上位を表したものである。1組と2組は、8項目のうち「1. 目標をたてる—今、みんなで頑張る目標がある学級だ。」という点に高い得点を示している。3組は「2. 一歩踏み出す—目標に向かって、一歩踏み出す努力ができる学級だ。」と「8. 自分たちの成長を認め合う—自分や学級の成長を互いに伝え合い、認め合うことのできる学級だ。」について同得点の数値を示している。4組は「4. 互いに認め合う—勉強や運動、または生活の中で互いに認め合うことができる学級だ」が上位で、5組は「4. 互いに認め合う—勉強や運動、または生活の中で互いに認め合うことができる学級だ」に高得点を示した。

表2 各項目の平均と上位

領域	項目	1組	2組	3組	4組	5組
アドベンチャーする力	目標をたてる	89	87	67	55	65
	一歩踏み出す	81	85	72	57	67
フルバリューする力	学級を楽しくする	82	82	71	66	73
	互いに認め合う	85	83	70	63	77
人生を開拓していく力	人生を開拓していく	76	73	62	60	65
	自主的に行動する	73	82	60	47	66
気づきを学びに変えていく力	課題発見と課題解決	80	78	66	50	59
	成長を認め合う	81	81	72	55	66

表3は反対に各学級の項目得点の平均と下位を表したものである。1組、3組、4組はともに「6. 自主的に行動する—先生に言われなくても、自分たちでルールを守りながら生活できる学級だ。」に最も低い得点を示し、2組は「5. 人生を開拓していく—自分に苦手なことや、人が嫌がる事に進んでチャレンジすることができる学級だ。」の得点が低くなっている。5組は「7. 課題発見と課題解決—学級の課題を自分たちで発見し、それを解決していくことができる学級だ。」が低くなっている。

表3 各項目の平均と下位

領域	項目	1組	2組	3組	4組	5組
アドベンチャーする力	目標をたてる	89	87	67	55	65
	一歩踏み出す	81	85	72	57	67
フルバリューする力	学級を楽しくする	82	82	71	66	73
	互いに認め合う	85	83	70	63	77
人生を開拓していく力	人生を開拓していく	76	73	62	60	65
	自主的に行動する	73	82	60	47	66
気づきを学びに変えていく力	課題発見と課題解決	80	78	66	50	59
	成長を認め合う	81	81	72	55	66

各項目の数値にも幾つの特徴が見られるが、表4と表5では、TAPで大切にしている概念領域について比較している。前述の質問項目を概念領域にまとめ、その上位と下位について傾向を記述する。領域で見ると「アドベンチャーする力」が上位を示したのは1組と2組、「フルバリューする力」が上位を示したのは、3組、4組、5組であった。

表4 領域の平均と上位

領域	項目	1組	2組	3組	4組	5組
アドベンチャーする力	目標をたてる	85	86	70	56	66
	一步踏み出す					
フルバリューする力	学級を楽しくする	84	83	71	65	75
	互いに認め合う					
人生を開拓していく力	人生を開拓していく	75	78	61	54	66
	自主的に行動する					
気づきを学びに変えていく力	課題発見と課題解決	81	80	69	53	63
	成長を認め合う					

反対に各学級で下位を示した領域は1組、2組、3組では「人生を開拓していく力」であり、4組、5組では「気づきを学びに変えていく力」が下位であった。

表5 領域の平均と下位

領域	項目	1組	2組	3組	4組	5組
アドベンチャーする力	目標をたてる	85	86	70	56	66
	一步踏み出す					
フルバリューする力	学級を楽しくする	84	83	71	65	75
	互いに認め合う					
人生を開拓していく力	人生を開拓していく	75	78	61	54	66
	自主的に行動する					
気づきを学びに変えていく力	課題発見と課題解決	81	80	69	53	63
	成長を認め合う					

d. 自由記述の結果

今回の調査では自由記述のスペースを取り、実施したTAP全般について「今日の感想」という項目で生徒が記入した。各学級20数名の記入で、内容も1行から5行まで多岐にわたる感想であったが、生徒の生の声に傾聴することで、今後のTAP開発の一助になるとともに、何より指導者へのフィードバックになるので、下記に感想を記述する。ただし重複する記述もあるので、今回はおおよそ1. TAPに対する本人の感想 2. TAPを通して見えたクラスや友達についての感想 3. TAPを通して考えた今後についての感想と、大きく3つに分けて記録しておく。なお、下記の下線部は筆者が加筆した。

I) TAPに対する本人の感想

- ・とても楽しかった。・みんなで協力して遊ぶのが多くて楽しかったです。・最後のが1番楽しかったです。・色々あって飽きることなく楽しめた。・特に最後のが1番盛り上がった。・なかなかいいものと思った。・こうやって遊ぶことが少なかったのがよかった、久しぶりな感じ。・普段体験できないことができた。・ものすごく楽しかったです、またやりたいです。・コミュニケーションとるのが大変で疲れたけど全体をとおして楽しかった。・中3になってあ

まりこういうことがなかったのととても新鮮で楽しかったです。・受験勉強や試験勉強があってイライラする時期だけど、今回こういう機会があってリフレッシュできたのではないかと思う。・意外と体を使うので疲れました。・ずっと笑っていた気がします。・心が少し幼くなったような気がします。・自分の意見を言うことができました。・遊ぶだけでなく考えるところもあって貴重な時間だったと思います。・ベリーグッドでした。・自分に足りないものがはっきりして良かった。・自分から前に進むことでふだん思っていることが楽しくなったりするんだということが学びました。・できたら毎日来てください (W) ・サンキューでした。

## II) TAPを通して見えたクラスや友達についての感想

・クラスみんなで協力できた。・いいクラスにしていきたい。・クラスで団結する意味や大切さがわかった。・クラスで取り組むのは行事ぐらいしかなくてこの機会に色々な人と話すことができてよかった。・団結して取り組めた。・とてもまとまりを持った力のある学年だと思った。・今回はみんなの絆を深めることができた。・全員が笑顔で体を動かさせていてとても良かったです。・今回のTAPでさらにクラスが良くなった気がする。・クラスの団結力が大きくなった。・ふだん話さない子と話すことができました。・新鮮で楽しかったです。・とても楽しい2時間だったと思う。・学年全体で交流ができてよかったです。・仲間と協力する大切さがわかった、仲間とあれば楽しくなるんだなと思いました。・みんな集中していたと思う、今まで話したことのない人にでも初めてはなしかけることができて良かった。・一つの目標をみんながしっかり意識していたと思う。・学級を見つめ直すことができた。・人というものが少しわかったような気がしました。・最初は乗り気ではなかった人も最後は笑顔で良かったです。・クラスのみんなと笑いあえて良かったです。・クラスを超えて話すこともあり、たくさんの人と関わりあった時間でした。・友達の面白いところが見られました。・いいクラスだと思ってたけど「発言力と行動力があるクラス」をプラスしたい。・なんかまとまりないな一っと思ってしまった。・クラスのまとまりの様子がよく分かりました。

## III) TAPを通して考えた今後についての感想

・今回の経験をこれからに生かしたい。・これからも仲間と協力して過ごしたい。・体育祭や合唱祭に続いてまたクラスの団結力を見ることができました。・これからもこの学年、クラスで楽しく協力しながら頑張っていけるクラスにしたいです。・今までの体育祭や合唱コンクールが成功したのは仲間と先生がいたからで、これからも頑張りたい。・これから大変なことがたくさんあるけど、協力して頑張りたいです。・今度はずっと難しいのをクラスでやってみたい。・成長を認めあえるクラスにしていきたいです。・クラスのみんなと一緒に居られる時間はもう長くないので大事にしようと思った。・クラスで何かできるのがあと4ヶ月しかないと思うと短くなって思いました。日々の生活を大切にしていきたいですね。・卒業式までみんなと支え合い協力して受験を成功させ笑顔で過ごせるといいです。・今日のプログラムでのこり4ヶ月をどう過ごすかを改めて考えることができました。・卒業までの生活を考えるきっかけになったと思います。・最近行事も終わりクラス全体で協力する機会がなかったのですが、今回、団結の大切さを再確認することができました。価値ある体験で卒業時に

はさらにクラスが団結できるように考えていきたいです。・あと数ヶ月、もっとお互いを知って仲良くなれたらいいです。・今日からでもいいから、最高に楽しかったと思えるクラスにしたいと思った。

## 5. 考察

本研究では「プログラム導入時の状況から次の方向性を確認するための手法」として、所属学級に対する生徒の考え方と学級に対する認識の傾向について、アドベンチャープログラムの考え方に関連する質問紙調査を通して確認することで、以後のTAPの目標設定やプログラム実施の一助になると考えて調査を実施した。

そして今回の調査では、学級によって差は見られるが「アドベンチャーする力」とフルバリューの概念について、クラスを肯定的に捉えている傾向が見られた。反対に自主性などに支えられる「人生を開拓していく力」や課題解決へのアプローチには消極的である傾向も見られる。そこで以下の4点について、解説に加え、その後のTAP展開につながる留意点を記述して、導入期以降のプログラム展開への示唆としたい。

自由記述については今後、他の教育機関で実施している同形式のアンケート調査と合わせた分析が予定されるので、本稿では記録としてとどめるが、今回のアンケートに関連すると思われる記述について、その一端を記述する。

1. 学級によって差は見られるが「アドベンチャーする力」と「フルバリューする力」については、どの学級も平均値として1位または2位として上位概念に挙げられている。また、この2つの概念を構成する学級の姿、具体的には「みんなで頑張る目標がある学級だ」、「目標に向かって、一歩踏み出す努力ができる学級だ」、「何でも話せる雰囲気がある学級だ」、「勉強や運動、または生活の中で互いに認め合うことができる学級だ」ということについて、肯定的に捉えている。

※ 生徒はTAPに限らず、アドベンチャープログラムの実施ということについて、実施前からおおむね好意的に受け取っている。したがって、学級学年全体の前向きな雰囲気を土台にしてアドベンチャープログラムを展開することは、TAP導入期における大切な要件と考えておきたい。特にこの場面ではadventure（冒険→予測できない体験やドキドキが味わえる状況）の要素が多分に感じられるアクティビティ<sup>19)</sup>の活用を留意点と考えている。

2. 一方で各学級の上位項目は同一でないケースがあるので、指導者側に立てば「学年全体を傾向として把握しつつも、学級それぞれが同質化されるものではない」ことに留意したい。例えば、「1. 目標をたてる-今、みんなで頑張る目標がある学級だ」で数値の高かった1組と、「4. 互いに認め合う-勉強や運動、または生活の中で互いに認め合うことができる学級だ」に高い数値を示す5組では、生徒の認識の内容や、学級全体での優先意識が異なることを承知しておく必要がある。

※ 学年の傾向は、その学年の雰囲気や方向性を特徴づける大切な要素であるが、同時にその学年の中でも、当然、「学級差」がある。そして、その学級差に注目することがアドベンチャー

プログラム導入期において必要なことになる。例えばアドベンチャープログラムの構成要素として「成長に向けて支援し、奨励し、積極性を重視するような成功体験志向」という考え方<sup>20)</sup>があるが、学級の指向性や傾向に伴って、柔軟なプログラム開発が考えられるからである。

3. 上記1と2の考察とは反対に、「人生を開拓する力」や「気づきを学びにかえていく力」については、どちらの領域も学級の中で下位に位置している。特に「6. 自主的に行動する-先生に言われなくても、自分たちでルールを守りながら生活できる学級だ」は、5組中3学級で一番低い数値を示しているが、その背景や個々の生徒の状況を含めて、プログラムを進める必要がある。このことは2組や5組の「5. 人生を開拓していく-自分に苦手なことや、人が嫌がる事に進んでチャレンジすることができる学級だ」や「7. 課題発見と課題解決-学級の課題を自分たちで発見し、それを解決していくことができる学級だ」などの低数値のケースでも同様である。

※ 長所を伸ばす指導と短所を補う指導のどちらを選ぶかという選択の問題ではない。つまり、どちらも必要なことは言うまでもないけれど、学級や学年の様子を見た時に、今はどちらかを優先させる必要があるという対応は必要と考えている。いずれにしても学級や学年でアドベンチャープログラムを継続して実施する場合には、数値の高い要素に焦点を当ててさらに高い数値に向けさせるか、あるいは数値の低い側面に着目して計画するのかの選択も、必要になってくる。そして、その選択はその学級学年の教員はもとより、当の生徒自身によってもなされる必要があると考える。具体的にいえばE中学校3年生の場合、TAP導入を希望する目的でもあった「自分だけじゃなければいいという考え方ではなく、行事で得たクラスや学年、学校で作り上げるといふ協力姿勢を進路や今後の残りの中学校生活でも生かせるようにしたいです。」という、学年のねらいを尊重しつつ、卒業までの限られた時間を踏まえた学級毎の課題として、生徒自身が考えて行動につなげる必要がある。

4. 一般的に、こうした調査を進めていく過程では「数値の高い学級＝優秀な学級、数値の低い学級＝あまり良くない学級」として受け取られることがあるので、それらの認識は生徒にも指導者にも正しくない考え方であることも理解させたい。何故なら、この数値は学級の平均値であり、どのクラスにも4の評価をつけた生徒と、1をつけた生徒が存在するからである。

※ これもまた4＝良い、1＝良くないと誤解されても困るが、TAPは前述の通り「集団の中で個がどのように関わるのか」ということに焦点を当てるプログラムである。したがって、学級全体の傾向を理解しつつも、その中で個がどのように活かされるかが重要になる。これは最初に記述したように、「学年全体と学級差」があるように「学級全体と個人差」があることが、プログラム実施の際に留意したい事柄である。

(自由記述について)

自由記述の内容は今後も分析を進めていく必要があると考えているが、本稿では「アドベンチャー力」と関連づけて記述する。しかしここでの記載は、今後の研究を前提におおよその特徴を記したもので、プレ調査としての立場にとどまることを付記したい。

I) TAPに対する本人の感想では、「楽しかった」や「笑った」など、「楽しさ」と言うことが



本人にとって印象に残った記述が多い。これはアンケートにも示される「学級を楽しくする」という項目として「フルバリューする力」との関連も考えられよう。また、「自分の意見を言うことができた」や「自分に足りないものがはっきりして良かった」などのように、自己を振り返る視点が生徒の中にあるのであれば、どの項目と関係が強いのかも、今後の課題として考える必要がある。

II) TAPを通して見えたクラスや友達についての感想は、おもに「クラスの協力」や「クラスで団結」「団結力」「絆を深める」などの記述に現れているように、学級の友達の様子に関心を示しながら、加えて「集団としての良い関係の中」で自分の学級を肯定的に捉えている。さらに今の段階で他者との関係性に満足せずに発展させたいという記述、例えば「ふだん話さない子と話すことができました」や「今まで話したことの無い人にでも初めてはなしかけることができて良かった」などの感想もある。これらは前述のI)で「楽しさ」という項目に加えて「互いに認めあう」という項目においても「フルバリューする力」に強く関連する傾向であると考えている。

III) TAPを通して考えた今後についての感想で最も多い言葉は「これからも」「今後も」という「時間を意識した言葉」であった。同様に「卒業まで」とか「残りの四ヶ月」というようにこの時期の中学3年生の思いが詰め込まれた記述に感銘も受けている。こうした記述を取り上げて見ると、数量的な調査ではパーセンテージの低かった「課題発見と課題解決」や「成長を認めあう」の項目が示す「気づきを学びにかえていく力」について、個々の生徒の中に思いとしてあるけれど、まだまだ表面には行動として現れてこない要因があると考えられ、今後の研究で大切な課題と考えている。

## 6. これからの課題と展望

プログラム導入期において、生徒の意識傾向を調査して、高得点領域の長所を伸ばし、低得点領域にも焦点を当てることは重要な要件であると考えられる。しかし本研究においてもアドベンチャープログラムや体験学習の事例研究<sup>21)</sup>同様に、幾つかの問題が残されている。

例えばその一つとして指導者養成の課題がある。アドベンチャープログラム導入の実践事例は多いものの、以後のプログラム開発を続けていく指導者が少なく、以後のプログラム実施が単発的になり、継続性を保証される実践研究が少ないということが挙げられる。また、アドベンチャープログラムに対する認識で言えば、教員養成系の大学教育における紹介や育成はもちろん、教員レベルでの研修も少ない現状があり、プログラムのよさが伝わっていかないということが挙げられる。

加えて、アドベンチャー教育の指導者に求められる資質開発も課題と言える。与えられた知識だけでなく、TAPで重要視されている「人と人との関わり」を様々な感覚で総体として把握する能力が求められよう。こうした傾向はアドベンチャープログラムに限らず他大学でも同様に、環境教育や野外教育、あるいはアウトドアスポーツ等、体験教育の立場から包括的に考えていくことが求められよう。

また、アドベンチャー教育が、今後の社会の様々な要請に応え、学校教育の場面で需要が高まると期待されているならば、初等中等教育の場面での効果測定も不可避の問題であろう。義務教育課程において、あるいは高等教育においても、TAPが児童・生徒・学生の学力形成にどのような影響を及ぼすのか、それぞれの発育発達段階に応じてプログラムはどのように構築されるか、

どのような立ち位置で関わるのが学校教育の中で知的向上を促進するのか、それらの関係性を明らかにする研究も求められている。

多忙な教育現場において、教員が現行のカリキュラムや教育業務を滞りなく続けていくことだけでも大変であることは、最近の新聞記事や報道番組においてようやく知られるようになってきた。けれどもそのことは教育に携わる者の周辺では以前から周知のことと言えよう。あるいはメンタルヘルスの立場から述べれば、近年の教員が直面するストレス要因の増加は<sup>22)</sup>、教員の適応障害率を悪化させていると言える。しかし、そうした厳しい状況の中において、それでも尚、各々の現場でそれぞれの児童・生徒に対して、希望や光明を求め、TAPの手法を少しでも導入したいという教員の姿勢は、覚悟があって故と推察され、何よりそのことに敬意を表したい。

E中学校で進められる実践と本研究で進めている検証と両者の積み重ねの共同作業、すなわち理論と実践の統合<sup>23)</sup>こそが、アドベンチャー教育発展の一助になることができると考えている。そしてその考え方は過去も現在も変わることはない。TAP創設当時の教育現場では「子ども期の消滅」<sup>24)</sup>という考え方が話題になったことがあり、体験学習をベースにしたアドベンチャープログラムは、学習指導要領における「生きる力」の考え方と強く結びつけられていた。それが今日では「アクティブラーニング」という形での方向を模索されている。いつの時代でも、生徒対応、学年経営、部活指導、教科運営、あるいは道徳科、それぞれの立場での違いがあるものの、「既存の枠組みだけでは解決が難しいと感じ、さらに一步踏み出すこと、あるいは踏み出そうとすること自体」、あるいは「そのままでも誰にも文句は言われなくても、自分が納得できないから行動すること自体」、実はそれがTAPで大切にしてほしいと願っている、アドベンチャー教育の理念そのものであると考えている。

## 謝辞

今回の論文執筆にあたっては、E中学校の校長先生のご理解のもと、昨年度より研究推進を続けられている先生にも大変お世話になりました。そして、実践に取り組まれた各学年の先生の姿勢に、私自身もあらためて勉強させていただきました。また、今回の執筆にあたり、査読をしていただいた先生、編集担当の先生にもお礼申し上げます。そして何よりも、今回のプログラムに積極的に取り組んでいたE中学校3年生の皆さん、どうもありがとうございます。関係の皆様にあらためて深く感謝申し上げます。

## 【引用・参考文献】

- 1) 難波克己 「動き出した心の教育—玉川アドベンチャー教育の取り組み—」 玉川大学学術研究所紀要 第12号 2006年 pp.107-114
- 2) 青木幸子 「教員養成課程で育成すべき能力と実践的指導力」 東京家政大学博物館紀要 第14集 2009年 pp.1-18
- 3) ディック・プラウティ、ジム・ショーエル、ポール・ラドクリフ 『アドベンチャーグループカウンセリングの実践』 プロジェクトアドベンチャージャパン訳 みくに出版 1997年 第2部5章 p.106
- 4) 前掲書6) 第2部6章 p.151
- 5) 工藤亘 「tapのインターンシップ経験で習得した能力や要素についての一考察」 教育実践学研究 第17号 2013年 p.13
- 6) 大山剛 「Tamagawa Adventure Programの15年間と現在の取り組み」 プロジェクトアドベンチャージャパン創立20周年記念シンポジウム発表資料 2015年
- 7) 井村仁 「アドベンチャー・プログラム経験が中・高校生の自己概念と不安に及ぼす影響」 筑波大学体育科学系紀要 第5号 1982年 pp.59-70
- 8) AFPYの手引き <http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a50400/afpy/tebiki.html> <http://www.geocities.jp/soledad/yssk/afpy-classroom/classroom-index.htm> AITCの実践 2015年12月1日確認

- 9) 田所三佳 「心の冒険教育の考え方を生かした学校作り」 高知県教育センター研究報告 2005年  
[http://www.kochinet.ed.jp/center/research\\_paper/h17\\_center\\_students/tadokoro.pdf](http://www.kochinet.ed.jp/center/research_paper/h17_center_students/tadokoro.pdf) 2015年12月1日確認
- 10) 中島弘毅、大内義昭、神谷明宏、月橋春美 「プロジェクト・アドベンチャープログラムが女子大生の内発的動機づけに及ぼす影響」 聖徳大学研究紀要 人文学部 第12号 2001年 pp.71-75
- 11) 工藤亘 「ファシリテーターの役割についての一考察」 玉川大学教育学部紀要「論叢」2010年 pp.17-26
- 12) 平野智之、奥田絢子、佐藤直樹 「体ほぐしの運動によるなかまづくりが児童の自己肯定意識に及ぼす効果」 宇都宮大学教育学部 教育実践総合センター紀要 第34号 2011年 pp.207-214
- 13) 文部科学省 「生徒指導メールマガジン」 第13号 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 2005年  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/magazine/060119201.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/magazine/060119201.htm) 2015年12月1日確認
- 14) 岩永定、柏木智子、藤岡恭子、芝山明義、橋本洋治 「宮城県におけるプロジェクト・アドベンチャーの取り組みと課題—子どもの自己肯定意識の向上に着目して—」 鳴門教育大学紀要 第22巻 2007年 pp.37-50
- 15) 川本和孝、白山明秀、吉田充志 「玉川大学における tamagawa adventure program (tap) の活用と効果—学士力を中心として—」 玉川大学学術研究所紀要 第18号 2012年 pp.37-44
- 16) 田中博之 『学級力向上プロジェクト 小・中学校編』 田中博之編著 金子書房 2013年 第1章 pp.1-22
- 17) 新潟大学教育学部附属新潟小学校著 『学級力で変わる子どもと授業』 明治図書 2010年
- 18) 新潟大学教育学部附属新潟小学校著 『学級力を鍛え授業で発揮させる』 明治図書 2012年
- 19) 大山剛 「玉川学園の adventure program の取り組み」 プロジェクトアドベンチャージャパン10周年記念シンポジウム発表資料 2005年
- 20) 前掲書19)
- 21) 降旗信一、宮野純次、能條歩、藤井浩樹 「環境教育としての自然体験学習の課題と展望」 日本環境教育学会 第19号 2009年 pp.3-16
- 22) 北添紀子、井上新平 「経験の少ない教員の精神的健康度調査—職場ストレスの対処行動との関連—」 日本社会精神医学会雑誌 第18号 2009年 pp.178-185
- 23) 森山賢一 「教育における理論と実践の統合」 教育実践学会設立20周年記念大会（第23回）記念講演資料 2015年11月29日
- 24) 田中義郎 「心の教育実践センターの創設にあたって」 玉川大学出版部 『全人教育』 第623号 2000年 pp.2-7